

増上寺徳川家霊廟の風景（6）

五重塔ふたたび&丸山古墳のこと



写真1 芝園橋の袂附近から五重塔を望む



写真2 月影園より五重塔を望む



写真3 芝公園グランドから妙定院、五重塔を望む

われる。なるほど、芝公園を歩きながら伊能忠敬の顕彰碑と共に丸山古墳の標識と説明板も目にしたが、実はあまり実感を持って眺めたことがなかった。

ところが今回、五重塔の位置を検証するために明治17年の彩色地図を眺めたりするうちに、にわかにかこの丸山古墳の事が気になりだした。

丸山古墳のことを最初に紹介したのは日本の人類学、考古学の草分け的な学者であった坪井正五郎博士(1863-1913年)であり、明治33年4月刊行の「考古」第1号から第3号に『東京市芝公園古墳実

寛永九年台徳院霊廟の造営に合わせて酒井雅楽頭忠世によって建立され、文化六年に酒井雅楽頭忠道によって再建された増上寺の五重塔については(1)の中で「日本の塔婆」というホームページからの情報を引いて簡単に紹介した。このホームページはその後情報を追補して充実した物になっているが、五重塔の位置については、掲載されている写真情報からも伝わってくる物がなかった。

何回か芝公園に足を運んでみたが、もう一つここだという位置を特定できるものも無く、戦後の西武鉄道との係争の中で貴重な位置情報まで失われてしまったものかと考えていた。

ところが最近になって五重塔の絵葉書を何葉か入手することが出来て、在りし日の五重塔の姿をはっきりと増上寺の風景の中に位置づける事が出来た。

まずこの3枚の絵葉書の撮影地点を調べてみたい。

写真1は日比谷通り芝公園グランド前交差点、芝園橋の袂附近から撮影したものである。

大正2年12月16日の日付のある雪景色の五重塔である。この年大正2年には絵葉書に見えている縦の通りが拡幅されている。

写真2と3は「月影園絵葉書」という8枚組絵葉書の中にある2葉である。絵葉書の袋には「東京芝公園 山下谷妙定院」とあり、増上寺の別院の一つ妙定院が出した絵葉書集と思われる。

『妙定院史』から変遷を示す2葉の図を掲載するが、図1の本堂、庫裡の裏から背面の赤羽川に面する庭園部分が月影園である。

写真2の「月影園より五重塔を望む」という撮影位置はこの図の庭園部分で、庫裡の背面を見ながら五重塔を写していることになる。

図2は妙定院前の道路の再拡幅と、赤羽川の上に掛けられた高速道路の位置を示している。

現在妙定院は、大きく敷地を削られながらも同位置に新本堂を完成させ法灯を守っている。従って妙定院の芝公園のテニスコートよりの位置がほぼこの写真位置に当たると考えられる。

写真3は芝公園グランドのサービスセンター辺りの位置から妙定院、五重塔を写している。道路は、グランドの観客席の背後を通っている。

図3に写真の関連位置を示しておく。

ところで、私が今ボランティア活動をしている東村山市の「ふるさと歴史館」では、増上寺というとすぐ丸山古墳のあるところですねと言



図1 大正4年頃の妙定院。左上が月影園

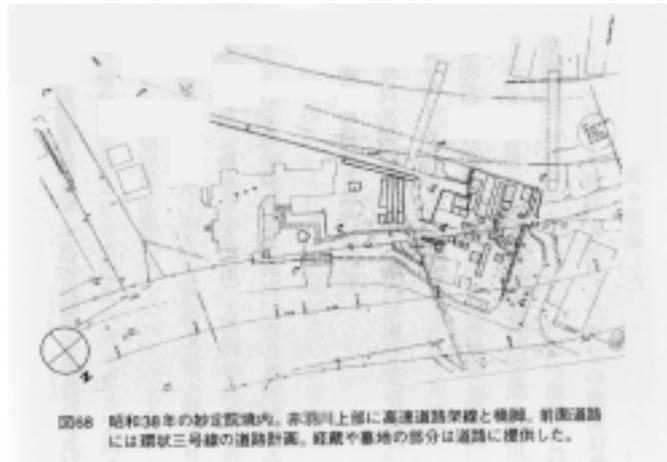


図2 昭和38年頃の妙定院と道路計画



図3 写真1、2、3の撮影位置

査の結果』を発表し、首都しかも徳川將軍家の靈廟の地が古墳群であったことを明らかにして耳目を集めた。

増上寺を形成する丸山の地には大型の前方後円墳である丸山古墳を含めて合わせて11基の古墳があったとされるが、増上寺の造営も含めて江戸時代までに大きく形を変え、近年のホテル建設により、多くは失われてしまった。

古墳群の調査は、増上寺徳川家靈廟の調査の行われた時期と同じく昭和33年9月6日から1週間掛けて明治大学考古学教室を中心に行われ、その報告は後に大塚初重、梅澤重昭「考古学雑誌」第51巻1号に『東京都港区芝丸山古墳群調査 - 丸山古墳の実測調査と第1号墳・第4号墳の発掘調査』として発表された。

この中で丸山古墳群について「南面を浸食される古墳附近は海拔二十米内外のゆるやかな起伏をもつこの台地独特の地形を示している。戦災

で焼失した増上寺五重塔は丸山古墳と第1号墳との間に位置していたのである。旧徳川家廟所台徳院靈屋を圍繞するように本古墳群は分布していた。そうしたなかで、丸山古墳は台地の東南縁辺に接して、東京湾海岸線に平行に位置し、第1号墳、第3号墳、第4号墳は侵食谷に面した縁辺上に、第2号墳は第1号墳の北方約30米に位置し、第5号墳、第6号墳、第7号墳、第8号墳は台地の中央部に向かって第4号墳の位置から北方に1列に連なり、第9号墳、第10号墳は丸山古墳北方に位置していた。本調査時に残存のものは第1号墳より第4号墳までであり、他は壊滅してしまっているので定かでないが、10基以上の円墳から構成される群集墳が台地末端に分布していたのではないかと考えられる」としている。

この論文の中には、残念ながら古墳の配置図が無いので、前記の「考古」第3号に掲載された図を左に掲げておく。この中で、瓢形大古墳としているのが現在の丸山古墳で昭和54年3月31日に東京都の史跡として登録された。

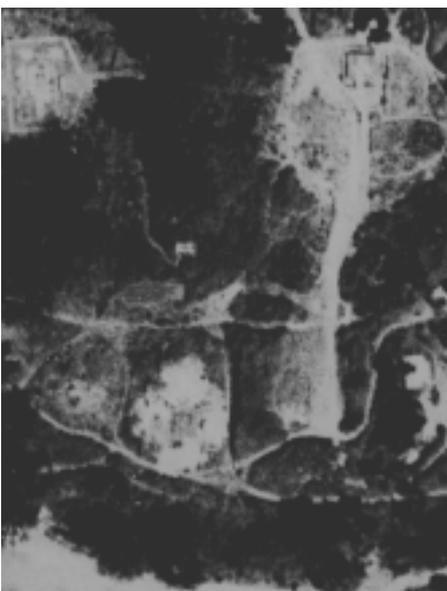
さてここで我々はもう一度明治17年の彩色地図に戻って五重塔の位置の確認をしてみよう。前記引用中にあったように、五重塔は丸山古墳と第1号墳の間にあった事が判っている。

彩色地図で丸山古墳の左隣に五重塔が記され、そのまた左隣に丘のような物が見える。これが第1号墳である。字が書かれているが、判然としない。

次に昭和22年の米軍の航空写真の拡大図を見してみる。丸山古墳の左隣に広範囲に露出した地面が見え、矩形の造形物も見取れる。その左隣には小高い盛り上がりが見え、やはり何か造形物が確認できる。左上に見えるのが焼失した台徳院の奥院である。



図4 「考古」第3号掲載図



ここまでは、彩色地図などにより既に確認の出来ていた情報である。問題はこの先の、もう一步踏み込んだ情報が欲しいわけである。「考古学雑誌」の中にも丸山古墳の実測図が掲載されているが、残念ながら古墳の位置のみで終わっていて、五重塔の在った位置までは描かれて居ない。そこで別の実測図が無いかとふるさと歴史館の学芸員の小川さんに調べて頂いた所、「東京都心部遺跡分布調査報告 都心部の遺跡 - 貝塚・古墳・遺跡 - 」の中に『港区芝丸山古墳測量図』が有ることが判った。実測図で左側矩形に区切られた部分には「芝ボーリング場駐車場」と書かれており、その下の張り出した部分にくの字に階段が描かれ細い丘状の部分に降りていくようになっている。

図5 「五千分の一」測量図(明治 17年) 写真4 米軍の航空写真(昭和 22年)

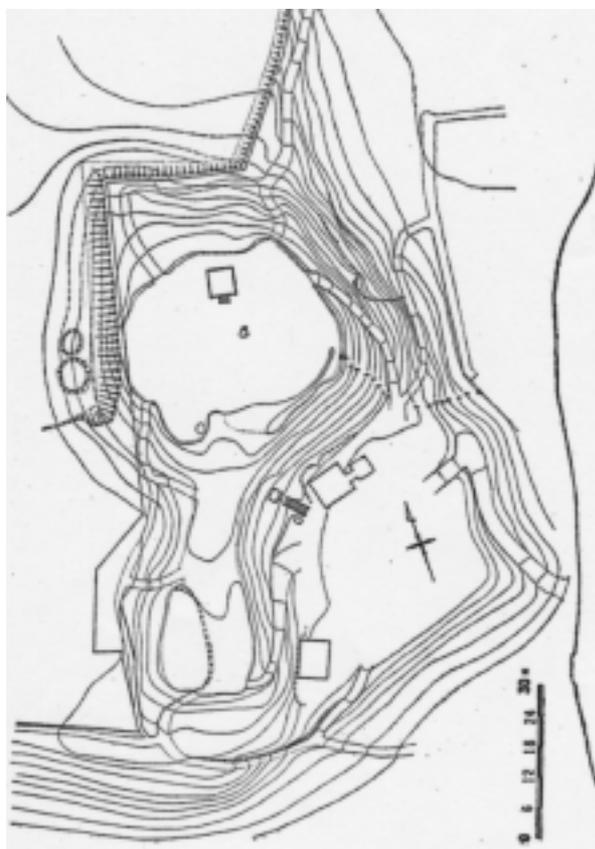
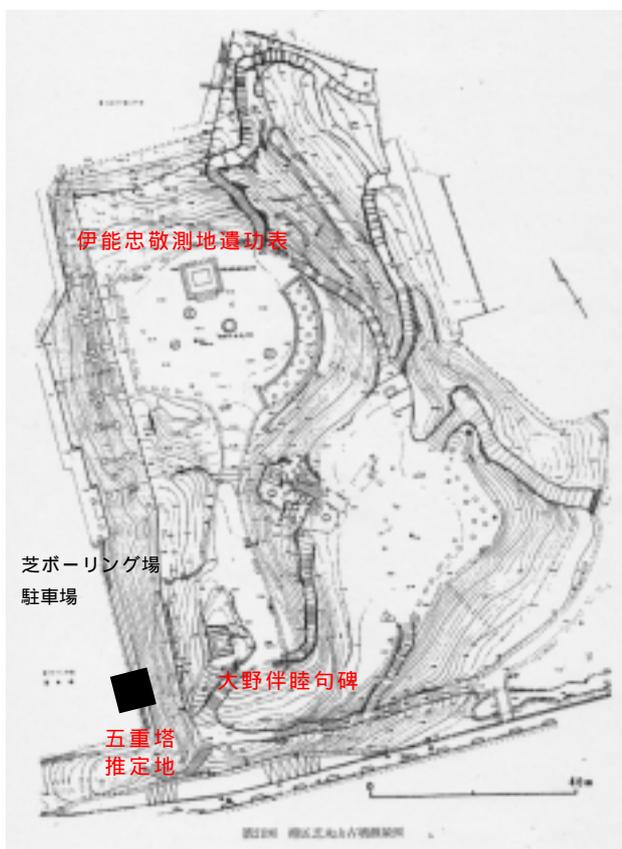


図6 「東京都心部遺跡分布調査報告」より

図7 「考古学雑誌」掲載実測図

図7は「考古学雑誌」第51巻1号に掲載された丸山古墳の実測図だが、ゴルフ場の駐車場として矩形に切り取られる前の状態を表している。昭和52年3月に報告された「東京都埋蔵文化財白書」のなかの「こわされてきた遺跡たち」の記述がこの辺りの様子を伝えている。

この場所は、丸山の大部分が所有地、11基の小円墳の区域は徳川二代将軍秀忠廟(御霊屋)で徳川家所有地となっており、さらに芝公園地として指定されていたので、指定時の状況は比較的よく維持されていた。ところが秀忠廟が戦災により焼失した上、昭和22年に公園地の指定が解除されたので、小円墳の区域と丸山古墳の後部部の西側斜面部分は25年から29年の間に譲渡され、事実上A株式会社の所有となった。(中略)ところが、昭和29年以前の仮指定物件は32年中に本指定又は解除のどちらかに整理されることになっていたためA社は解除方を強く希望し、そのこともあって、遂に32年6月、丸山古墳群の史跡仮指定は解かれたのである。

昭和33年5月、A社は文化財保護法第57条の2第1項による事前届出さえも行わずに自社所有地の



図8 「考古学雑誌」掲載実測図

整地工事に着手、都教育委員会が工事一時停止を指示したときは、すでに丸山古墳は後円部西側斜面を切り取られ小円墳は4基以外が全部削り取られ、その4基のうち3基は原形を著しく損なわれてしまうという状況を呈していたのである。

その後都教育委員会は、丸山古墳の実測図作成と残存していた小円墳の発掘調査を実施したが、結局丸山古墳の破壊部分はそのままで、小円墳群は完全に消滅した。

前述したように明治大学考古学教室の後藤守一教授を中心に丸山古墳の調査が行われたのは昭和33年9月6日から1週間、「東京都埋蔵文化財白書」に有る様に都教育委員会の依頼によるものであった。

図7、図8がこの発掘調査時点のものであれば、台地は緩やかな斜面を残しており、今よりは古い形状を留めていたことになる。

写真5は『東京府史蹟保存物調査報告書第9冊府下に於ける仏塔建築』に掲載された写真だが、写真左側に「丸山古墳」の標識が見え、五重塔の第1層が少し下がった位置に在るのが判る。

撮影位置はおそらく丸山古墳の後円部の伊能忠敬の記念碑のある広場の部分と思われる。写真6は実測図では芝ボーリングの駐車場として切り取られて



写真5 『東京府史蹟保存物調査報告書』より



写真6 増上寺絵葉書より

了った矩形部分の丁度張り出しの隅の部分辺り、丸山古墳西側斜面の下の平坦部から北向きに撮影したのではないと思われる。

写真6には五重塔の初層部分から写っているが、背後左側が少し小高くなっているのが分かる。写真7は『東京市史稿 遊園篇7』に掲載された写真。手前右側が小高くなっており、写真6よりは少し北東側、斜面を丸山古墳の方へ幾らか登った位置で撮っていると思われる。ところで『東京市史稿』に掲載されたこの写真の説明には「芝公園 五重塔 大正十一年頃ノ写真ナリ。戦災ニヨリ焼失。現在は台石ノミ存在」と記載されている。この「台石ノミ存在」の記述が後々まで論議を呼ぶことになる。

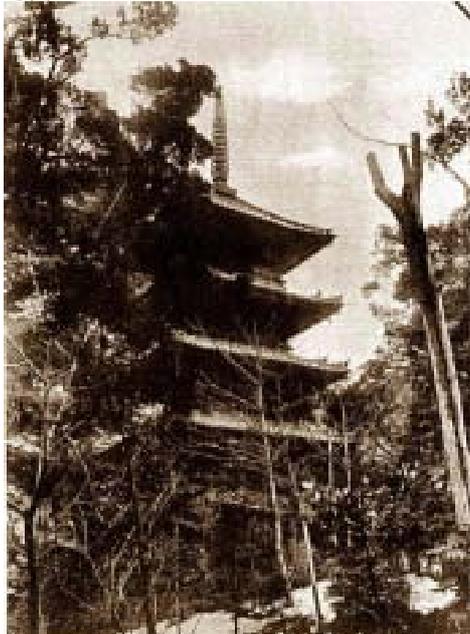


写真7 「東京市史稿 遊園編7」

五重塔の建築物としての特徴は『東京府史蹟保存物調査報告書第9冊 府下に於ける仏塔建築』に記載されている。この報告書には昭和7年3月の奥付が附されているが、寛永寺、本門寺の五重塔等戦災を逃れて今に残る五重塔の他に浅草寺やこの増上寺の様に戦災で失われた塔が報告されている。管見ながら、増上寺の五重塔に関する纏まった報告は他になく、貴重な報告と言える。

基壇については次の様に書かれている。

本塔婆は丘上の平地に建てられているが、基壇が設けられず初層には勾欄の無い切目縁の廻縁を附し、高く縁の廻縁を附し、高く床を設けている所、平安後期以降の塔婆建築の通性であるが、斯る手法は特に関東地方に於ける江戸時代の塔婆には好んで用いられたものである。四方中央部に四級の石段を設け、廻縁に上る様になっている。」としているので、基壇の跡のような物は残されていないことになる。ただし、「四方中央部に四級の石段を設け、廻縁に上る様になっている。」という記述からは、石段部分が遺構として残った事を伺わせる。改めて写真4の航空写真の五重塔の跡を見てみると、明らかに方形の遺構が見て取れる。

『東京市史稿』の「台石ノミ存在」というのはこの石段の跡ではあるまいか。

写真にしかその面影を辿れない今となつては、意匠の細部はこの報告書に依る他は無いので、今少し詳細を引用しておく。

四方中央部に四級の石段を設け、廻縁に上る様になっている。柱は側柱十二本と、内部に四本の四天柱と心柱とあり、合計十四とであるが、何れも丸柱である。今其の寸尺をしめさんに、

縁	高	三尺七寸
縁	幅	六尺三寸
縁	板厚	三寸五分
柱	間(中央間)	五尺六寸
同	(両脇間)	五尺一寸
同	(四天柱間)	五尺六寸

で初重十五尺八寸四方の塔である。そして四天柱の内部即ち内陣は須彌壇を設置し五体の仏像が安置されている。

本塔婆は其の結構及び細部意匠に於て、江戸末期の手法を最もよく表はしている。外形は細長く、各層の遞減まことに少なく、為に塔身と相輪との割合は一見して不均衡となっていることが感じられる。更にまた細部に就いて見るに木割は相当に大きく、比較的簡素に出来ているが、古塔婆に見る様な荘重さと、安定の諧調は見るべくも無い。恐らく此れ等は当代の建築界に於て木割法が余りに完成されて、作者の構想の赴く余地をなからしめ、一定規式に従って細緻な技巧に依って安々と組立てる技倆を修得していたが為ではあるまいか。



写真 8 芝公園テニスコート前より撮影



写真 9 方形部フェンス位置

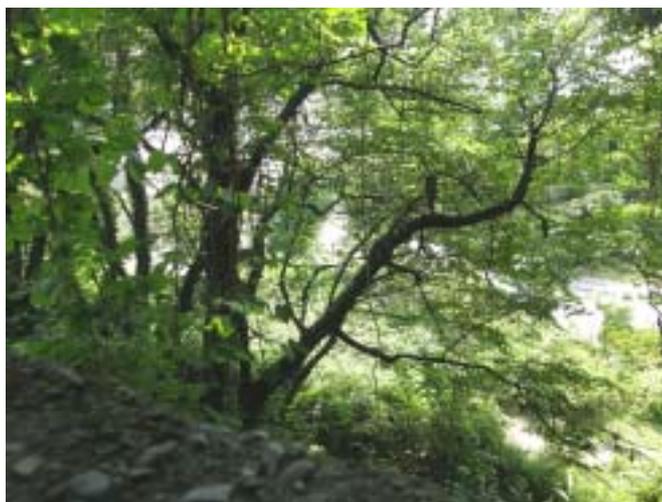


写真 10 五重塔の旧所在地(推定)の現状

初重十五尺八寸四方の塔であるから 4.79m 四方と言うことになる。これを図 6 の実測図に示してみた。これは写真 4 の米軍の航空写真に実測図を重ね合わせて位置を割り出した物で有るが、経過を示す図面を写真 11 に示しておく。但し、航空写真は上空 1,524 m から芝公園周辺を広範囲に撮影した物であり、当然に中心から上下左右に歪みを持っている筈である。これらの歪みを補正するプロの技術を持っているわけではないので、大まかな比較と考えて頂きたい。実測図も、必要な部分をリライトしたもので等高線も一部省略している。あくまで五重塔の位置を割り出す為の目的に合わせて作業を行っているので、注意してご利用頂きたい。

この図で判る様に五重塔の位置は駐車場の為に丘陵を削平した部分であることが判る。

さてここからは、先日芝公園を訪れた時の写真を元に、写真 8 は芝公園グラウンドのテニスコートの位置から台地の張り出した部分を撮影したものである。写真には黄色い矢印で写真 9 のフェンスの位置を示しておく。

写真 2 の「月影園より五重塔を望む」はもう少し妙定院よりの位置から写したことになる。

テニスコート前の横断歩道で道路を渡り、芝公園へ入る。左手にある丸山古墳への緩やかな坂を登っていく。坂は一旦平坦な部分に出て、その先は黄色い矢印で示したフェンスで行き止まりになる。

写真 10 は古墳の方へ上がって坂道からフェンス部分を写したものである。丁度最初の坂道を登り切った先にあるフェンス部分には、扉があり扉の先には下へ向かう小径の跡を見て取ることが出来る。残念ながら降りていくことは出来ないが、この小径を降りた先に平地部分があることが判り、この平面の延長部分が五重塔の建っていた平面位置だと思われる。写真 6、7 の撮影推定位置である。

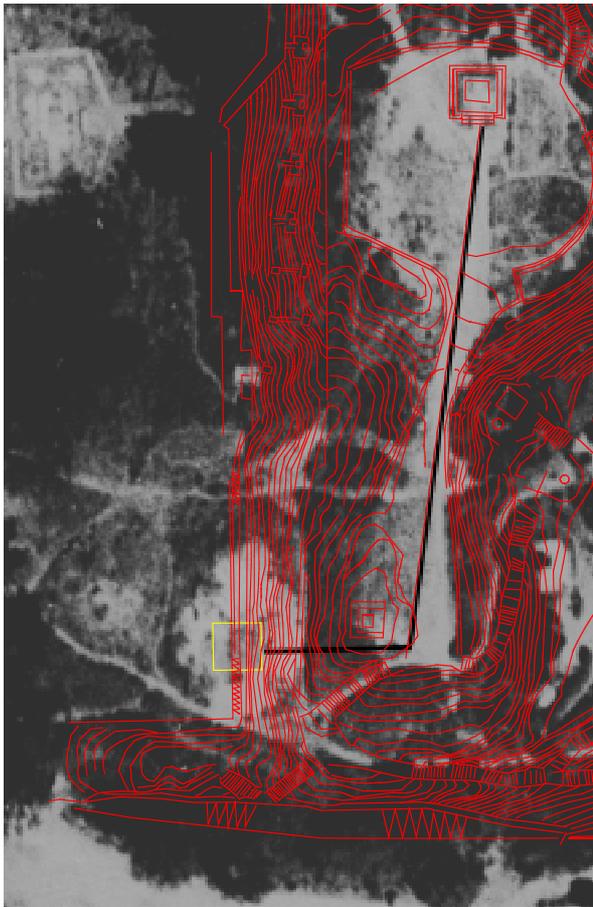


写真11 航空写真 - 実測図合成図

大野伴睦の句碑の脇にも下に降りていく道筋が残っていて図6に記された道の跡だと判る。

写真10は今も休憩所になっている伊能碑の前の広場の一番手前側、写真5の長椅子の左側から、五重塔の推定地を撮った物で有る。写真5の様にすっきりとした景色にはなっていないが、歴史の残像を思わずには居られない一時であった。

五重塔自体の建築物としての後生の評判は芳しからぬ物が有るが、安藤広重の「名所江戸百景」にも描かれた江戸の風景である。將軍家菩提寺の地に佇む塔はそれだけで錦絵の世界となる。

最後にこの錦絵を掲げて、この項を終わりたい。



写真12 「名所江戸百景」より